

## 「 春雨を呼ぶ東風 」

受験シーズンに、靈験あらたかな学問の神様といえば、平安時代の文書博士（もんじょはかせ）「菅原道真」。受験生に絶大な人気の天満宮と合格の守り札。

道真公の有名な一句は、現代でも梅の便りと共に、生き生きと根付いている。「東風（こち）吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそ」

道真が九州大宰府に左遷されたのは平安時代の延喜元年（901年）。当時は気候が温暖期であり、年間の平均気温は現代と同じ15度程度で暖かかったらしい。西高東低の冬型気圧配置は、きっと長続きしなかっただろう。道真が待ちわびる京の都から紅梅を運んできたという、東風が吹くチャンスがどの程度あったか興味津々。

ちなみに、福岡と京都の2月の最多風向（一番多く吹いてくる風の方向）を気象庁の平年値で調べてみた。福岡は南東の風が約15%、京都は北西の風が約12%。大宰府と平安京では、逆方位の風が吹くことが多い。現代と平安の昔では、千百年の時間差と都市の気候に影響を及ぼす地形や植生の条件に差がある。それでも、平均的な風向に、そう大きな変化はないものと考えて良いだろう。どうやら連れない風が吹き、飛梅に託す道真の万感の願いは、都の貴人には届かなかったという可能性が高い。

これにより、冒頭句は道真公の切なる祈りがこもり、心に染込んでくる。

ところで、天気のことわざに「東風、急なれば蓑傘（みのがさ）忘れるな」や「東方の鐘の音がよく聞えると雨」がある。これから春先に向け生温かな東風が吹き、黒雲が広がってきたら、野良仕事の手や予定を早めることをお奨めする。

（ 気象情報システム株式会社 高 津 敏 ）